

平成22年4月21日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19720204  
 研究課題名(和文) 武器・農工具の装着方法に基づく日本列島における金属製利器普及過程の研究  
 研究課題名(英文) Research of metallic device spread process in the Japanese Islands based on method of wearing arms and tool

研究代表者  
 寺前 直人 (TERAMAE NAOTO)  
 大阪大学・文学研究科・助教  
 研究者番号：50372602

## 研究成果の概要(和文)：

武器や農具、そして工具は石器や金属で製作される刃先と、木器で製作される柄で構成される。本研究では、それぞれの装着方法の時期と地域での違いを分析した。

その結果、弥生時代中期における石器と鉄器の関係に地域差があることが判明した。具体的には日本海沿岸地域では石器が金属器の代替品として用いられていることが判明した。一方、畿内地域では石器は独自の器種として発展するが、その後、弥生時代後期になると急速に消滅する。

## 研究成果の概要(英文)：

Arms, the farming tool, and the tool are composed of the handle produced with wood and the blade produced with the stone or the metal. I analyzed whether each material and there was a difference in the installation method in Yayoi period.

The regional variation turned out in the relation between the stone tools and ironware in the middle on Yayoi period. It concretely turned out that the stone tools was used as a substitute of a metallic tools in the Sea of Japan coast region. On the other hand, the stone tools develops as an original machine kind in the Kinai region. Afterwards, it disappears rapidly when becoming the latter term on Yayoi period.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	420,000	2,720,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：弥生時代・石器・鉄器・代替品・武器

## 1. 研究開始当初の背景

地中に残る遺物は過去の物質文化のごく

一部である。とくに鉄器や木器の残存は埋没環境に大きく左右される。しかし、弥生時代

に鉄器が普及するという事実は、日本列島における人口増加と社会複雑化の要因として重視されてきた。具体的には鉄器利用開始による生産効率の飛躍的向上が想定され、それを支えた冶金技術をはじめとする高度な生産体制の維持を可能とした社会構造が重視されたのである。

しかし、弥生時代から古墳時代への社会変化を論じる上で重視されてきた近畿地方では鉄器出土量がきわめて少なく、腐朽しない石器の増減にもとづき、鉄器の普及が論じられてきた。そして、実際には出土が乏しい鉄器の存在を前提として、畿内地域の発展が弥生時代に想定されていたのである。

一方、朝鮮半島に近い九州島北半における鉄器の出土は多く、さらに近年は鉄器出土例が四国や山陰、北陸地方でも増加している。このような現状をふまえて、畿内地域における「みえざる鉄器」論への批判が強まっている。そこで私はこのような状況をふまえ、先行研究を参考に、木製柄の分析から鉄器化進度の地域差を比較できるのではないかという展望をもち、資料の分析を平成18年度から開始した。ところが実際に分析を進めたところ、鉄斧用か石斧用かの区分が難しいもの、いいかえれば両者に用いることのできる斧柄が弥生時代中期に数多く存在することが確認できたのである。

## 2. 研究の目的

前述した現状認識をふまえ、本研究では各素材の製作者がどの斧身・剣身と柄、装具との組み合わせを意図したかを明らかにすることをめざした。例えば、木製斧柄の製作者が、鉄斧、石斧どちらかの斧身あるいは両用を意図したかを分析する。つまり、石斧・石製短剣と鉄斧・鉄製刀剣が、それぞれ個別に製作そして型式変化したのではないこと、そ

して製作段階において相互にどのような影響関係があったかを、器種(①工具、②農具、③武器)ごとに明らかにすることをめざす。

## 3. 研究の方法

対象とする時期は、弥生時代前期から終末期に属する資料であり、関連資料として縄文時代後・晩期と古墳時代前半に伴う資料についても参照する。対象とする地域は西日本を中心とするが、良好な事例については国内、国外を問わず対象とした。つまり、網羅的な集成ではなく、本研究に適した資料群を集中的に分析した。

## 4. 研究成果

まず、弥生時代開始期において武器と工具ともに金属製利器の普及はほとんどみられなかった。ただし、水稻農耕の伝来とともに新しい石製工具である扁平片刃石斧や柱状片刃石斧、さらには肉厚の両刃石斧が朝鮮半島から円滑に普及する。なかでも扁平片刃石斧や柱状片刃石斧は膝柄の先端に平坦な斧台が作り出された新しい型式の斧柄をとめない普及していったことが判明した。一方、同じく朝鮮半島より伝来した有柄式磨製石剣(一体式磨製短剣)や有茎式磨製石剣(組合式磨製短剣)、そして有茎式磨製石鏃などの武器の普及は低調であった。とくに木製柄と装着しなければ、短剣として使用することができない組合式磨製短剣は、玄界灘沿岸地域で散見されるものの、以東の地域での類例は少ないことが判明した。また、矢柄に挿入して使用することが一般的であった有茎式磨製石鏃も、日本列島に伝来すると茎部が徐々に扁平化していく。この変化は在来の打製石鏃の矢柄装着方法である挟み込み式に適応するための型式変化であると理解できた。

さらに金属器の普及時期である弥生時代中期には石器と木製柄との分析から、これま

で器種として認定されることがなかった銅戈模倣ではない石戈の存在を明らかにすることができた。

また、弥生時代中期になると北部九州を中心とする日本海沿岸地域と畿内から中部瀬戸内地域との間には、石製と金属製の工具や武器の関係に次のような違いがあることを指摘した。

まず、日本海沿岸地域では板状鉄斧を装着する斧柄に装着することが可能な扁平片刃(両刃)石斧が増加する。一方、大阪湾沿岸地域をはじめとする畿内地域では鉄斧と互換性のない柱状片刃石斧が多数を占め、これらが四国島より流通していることが分かった。

さらに北部九州地域をはじめとする前者の地域では金属製武器の所有者を頂点とする階層構造が弥生時代中期初頭に成立することが、福岡市吉武高木遺跡や福岡市古賀市馬渡・東ヶ浦遺跡、そして宗像市田熊石畑遺跡において限られた厚葬墓に細形銅剣をはじめとする金属製武器が集中することから明らかとなった。そして、石製短剣の器種にも大きな変化が生じることが判明した。すなわち、弥生時代早・前期段階には一体式と組合式の両者がほぼ同じ比率でみられたのが、中期になると石製短剣は金属製短剣の代替品として機能する組合式が北部九州地域のみならず日本海沿岸地域では石製短剣の多数を占めるようになる。さらにこれらが低位の埋葬施設に副葬されていることを指摘することができた。つまり、北部九州を中心とする地域では、組合式である金属製短剣を頂点とし、組合式の石製短剣を下位とする武器の階層構造が成立していたのである。

対して、後者の畿内地域をはじめとする地域では、弥生時代開始期に伝来した一体式磨製短剣の系譜をひく、一体式の打製、磨製の短剣が盛行する。柄に装着せず使用される点

で、これらは金属製や石製の組合式短剣とは異なる。そして、これら一体式石製短剣は副葬品としても重用されるものの、北部九州地域における金属製短剣とは異なり、階層上位層の埋葬施設のみにもなうことはないことから、これらが階層区分に用いられたとは考えられない。

石製、金属製利器と柄との対応関係を検討した結果、北部九州地域をはじめとする西日本の日本海沿岸地域では、短剣や斧をはじめとする金属製利器が導入されると石器はその代替品として機能するのに対して、畿内地域では金属製利器が伝播しても、ひきつづき石器独自の型式を生産しつづけることが明らかとなったのである。そして、この背後にはそれぞれの地域における社会構造の差違が反映している可能性が高い。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①寺前直人「各地における生産と流通・関西」『季刊考古学』第111号特集石器生産と流通にみる弥生文化、雄山閣、査読無、2010年、pp. 73-78

②寺前直人「もう一つの石戈」『待兼山考古学論集』Ⅱ、大阪大学文学研究科考古学研究室、査読無、2010年、pp. 231-248

③寺前直人「銅鐸と武器形青銅器—畿内弥生社会の変質過程—」『考古学ジャーナル』590、査読無、2009年、pp. 26-29

④Shinya Shoda・Oksana Yanshina・Joon-Ho Son・Naoto Teramae  
New Interpretation of the Stone Replicas

in the Russian Maritime Province:  
Re-Evaluation from the Perspective of  
Korean Archaeology *The Review of Korean  
Studies* Volume 12 Number 2 査読有、2009、  
pp. 187-210

〔学会発表〕(計2件)

① 庄田慎也・Я н ш и н а О. В・孫峻鎬・  
寺前直人「沿海州の武器形石器再論」2009  
年2月21日、第10回北アジア調査研究  
報告会、東京大学本郷キャンパス

② 荒木幸治・若林邦彦・森岡秀人・寺前直人  
「弥生時代後期の畿内社会－池上曾根大集  
落その後の時代－」座談会考古学研究会関西  
例会第154回例会、2008年10月4日、大阪  
府立弥生文化博物館

〔図書〕(計1件)

① 寺前直人『武器と弥生社会』大阪大学出版  
会、2010年、pp. 1-345

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺前 直人 (TERAMAE NAOTO)  
大阪大学・文学研究科・助教  
研究者番号：50372602